

# マザー・テレサは なせ!

## The Secret of Mother Teresa

R・M・ラーラ 記  
 篠野 孝 訳



マザー・テレサ、本名をアグネス・ゴンクア・ベジャキュー。一九一〇年八月十七日、ユーゴスラヴィアのスコピエで農業を営むアルバニア人のもとに生まれた。十二才で尼僧を志し、十八才でロレット修道院へ、その後、一九二九年、十九才でインドへ渡り、一九四八年、インド市民の資格を得た。

### 「裁こうとする前に、愛しなさい」

「教育は私の喜びです。」この言葉が示すように、マザー・テレサは十七年間におよび教師生活を送った。またカルカッタの聖メアリー高校の校長を務めたこともあったが、彼女が救済活動を始めるにあたっては、この時の教え子も多数参加している。学生たちは恵まれた家庭に育っており、身奇麗にしていたが家に戻り、目にするのはモチジュールのスラムの悲惨な姿であった。そこに社会の明暗を眼の当たりにした思いだったが、このスラムの惨状に彼女のころは揺れ動いた。この満たされないうころをいやすために彼女は必死に祈りを捧げた。そしてその祈りはある時彼女がダージリンに向う汽車の中で答えられた。彼女は語っている。「すべて

を投げ棄て、スラムへとおもむき、貧しい中でも最も貧しい人びとの間で主に任えよ。』という神の御意志を私ははっきりと聞きました。」

あるとき私は彼女に尋ねたことがある。「それが神の意志だということはいささかも疑われなかったわけですか。どうすれば神の意志を知ることができるのでしょうか。」答はこうだった。「謙虚さと誠実さをもって自分の心に耳をかたむければ、誰でも神の御意志が何であるか、はっきりと知ることが出来ます。私たち一人一人の存在の背後には必ず神の技と計画があります。」

マザー・テレサに最初に救われた女性は、半分ネズミとアリにぐわられていた。その人を病院に入れるためには、彼女は座りこみをも辞さなかった。その日のうちにも幾人もの行き倒れた人びとがいた。彼女はそこで役所へ出かけ交渉の結果、カリへの巡礼団の休息所を提供されることになった。それは屋根だけの建物であったが、さっそく病人が運びこまれた。今迄にそこには三万人にも及ぶ人が収容され、約半数が亡くなった。

「私のことはすべて神におまかせしてあります。自分について何を思い煩うことがありません。」

彼女はこのようにも言っている。

「私たちにできることは貧しい人びとが神に召されていくのを手伝いすることだけです。そこには私たちが立ち入る余地はありません。最後の時に神と共に居るといふ平和を経験し、キリストの救いにより罪をゆるされ、地上の生涯を神に感謝しきたるべき世界での生命の希望を確認するお手伝いをするだけなのです。」

天に召される最後の時を過ごす建物は、清い心に満ちた館と呼ばれ、そこでの人びとは誰もが惜しまれ、愛されながらこの世を去っていく。「カルカッタの宝」と呼ぶにふさわしく幸せあふれる人びとで満ちているのだ。死に直面している人たちはいろいろなものをねだる。たとえば聖なるガンジスの水であったり、祈りであったり、タバコのこともある。また、最期を見守ってほしいとだけ願うものもいた。

この救済活動が始められて間もなく、彼女の施設にまわりついたり、彼女を追い出そうとした者もいた。ある者は彼女を追放するために警察署長あてに

手続きをとった。しかし現場を訪れた署長が目にしたのは、耐え難い悪臭のなかで懸命に働いているマザー・テレサの姿だった。戻った署長は訴えた者に対して告げた。「たしかに私はあの女を追放するといった。しかしその前にききたい。皆の家族の誰があの女のしていることを引き受けるだろうか。引き受け手が現れたら私は約束を守ろう。」

皆は言葉もなく去っていったが、いやがらせはとまらなかつた。ある日、彼女はそれ者たちと対決したときこう言った。

「それで気がすむのなら私を殺しなさい。まっすぐ天国へまいります。そのかわり、こんなバカなまねはこれきりにしなさい。」

いやがらせは、ようやくなくなつた。この種の身寄りがない人たちが最期をむかえる施設はいまや六十二カ所になっている。マザー・テレサの救いの手は、みなし子たちにも差しのべられた。病院、施設を問わずそこで

サジを投げられた子供たちはもちろん、ゴミのように捨てられ泣き叫ぶ乳のみ子も等しく加護のもとにおかれた。次にとりか

かつたのはライ患者の救済だった。一九五七年、初めて五人の患者が収容された。幸いなことに、あるベンガル人の医師の協力が得られ、その後ある時期には患者の数が一万人に達したこともあった。シスターたちは特別の訓練を受けていることもあり患者は手遅れにさえならなければライを克服できる体制にある。最初のライ患者の施設を開こうとしたところ、たまたま役

人の家に近かつただけの理由で許可が得られなかつた。そこで彼女は妙案を思いついた。もし特定の場所に建てられないのなら、移動できるものにしたらどうだろうと、そしてそれを実行した。彼女は後日、その役人に言った。「あなたのおかげで、

百倍の人が救われるようになりました。現在四百二十五の移動治療施設が稼働しており、このほかにシャンチナガールには西ベンガル州から提供された土地に大きなライ患者のコロニーも設けられている。

イエス・キリストと一体となつた生活を通して、神との出会いを求めること、それが信仰の目的です。」

「皆がやりたがらないことにあなた方をかりたてているものは何なのでしよう。」という疑問について彼女の答は次のマタイ二章二五節によるものだ。

「わたしの父に祝福された人たちよ。あなたがたは、私が空腹のときに食べさせ、渴いでいたときに飲ませ、旅人であつたときに宿を貸し、裸であつたときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたるときに訪ねてくれた。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、私にしたのである。」彼女らの行動のすべては、この精神に基づく。「病めるものに愛を。イエス様をお使いになつたのは、なんと偉大であつたことでしょう。その神にお仕えできるのは、身にあまる光栄です。」これは彼女の祈りの一部でもある。

あるとき、マザー・テレサに言った。「皆さんが取組まれているのは貧困の表面をつくるうだけ、その根本にある人間のもつ利己心、残酷さには目をつむってしまふことにならないでしょうか。」彼女はたちどころにこう答える。「貧困は人間の業になるものであり、決して神がもたらしたものではありません。

だからこそ、神はイエス様を我われのもとに使われ、貧困を知らうとなさつたのです。ここで共に働く者にとって、貧困は喜びと自由のもとなのです。我われのもつ残酷さにふれることは、人間を裁くことになり、助けを必要としている人がたくさんいます。」人間を見つめ、裁くことを職業とするジャーナリストである私にとって、この言葉は耳にこびりついて離れない。

彼女の行動の奥には、新しい文明の到来を予見させるものがある。その価値観は我われのものとかげはなれており、我われが等しく求めてやまない内面の充実を現わしている。彼女の前には権力とか物質的豊かさといったものは何の意味もない。哲学者にできることはせいぜい文筆活動だが、マザー・テレサは身をもってその信念を行動に結びつけながら、人間の英知の輪を世界中に広げている。

謙虚さと誠実さをもつて自分の心に耳をかたむければ誰でも神の御意志が何であるかはつきりと知ることができます。」

「謙虚さと誠実さをもつて自分の心に耳をかたむければ誰でも神の御意志が何であるかはつきりと知ることができます。」

生と死、これが彼女のテーマであった。言葉と行動は常に一体であり、その融和こそがあの驚くべき活力をうんでいる。中絶問題にしても、ただ「罪深きこと」と論じるにとどまらず、捨てられた子がいればその小さき生命を守るための努力を惜しまない。愛することにおいて貧

しき人にも、西洋の富める人にも全く同じである。カルカッタで行き倒れる人がもつ淋しさも、文明社会で生きる人がもつ淋しさも、彼女の心を痛める点では何の差もなかった。この優しさが世界中のあらゆる問題から目をそらすことを許さない。今は、ベトナムのポートビープ



ルに心を砕いている。

いま、世界がさいなまれていく最大の病気が人びとの孤独であり、最大の悪は隣人への無関心のみられる博愛の欠如であるというのが彼女の考えであり、「愛は家庭より育まれる」と主張する。「共に祈る家族は共にあゆむ。共になければ愛すことはできません。家族同志に愛がなくて、なぜ他人を愛することができよう。」「何か善きことをなどと考えると、そこには欲やねたみが生じ、神の姿を見失わせます。澄んだ心こそが神への真の従属をもたらし、それが自由なのです。」この姿勢に、超人的な日常に耐えていられる心の安らかさの秘密があるように思える。ただ、これも神に対する完全な従属なくしては得られないのであり、神の意ならば最愛のものも捧げる用意のある彼女にして初めて可能なのだ。

彼女には何も愛えるものはない。「私のことはすべて神におまかせしてあります。私は神のことだけを考えればいいのです。」この自我の解放こそが、あのか細い身体から生まれる信じ難いほどの活力の源である。

起床は四時から四時半。三〇分ほど祈りを捧げ、ミサにも欠かさず出席する。身の周りを整えて、それぞれの仕事につくのは七時。それは決してなまやさしい日常ではない。また、晩には晩で一時間の祈りと礼拝がまつている。「ミサと祈りなくしては、この生活を一日も続けていけません。この仕事をやっていけるのは祈りのたまものです。祈れば祈るほど、仕事もよくできます。祈りは心を豊かにしますから。仕事と祈りが妨げあうこともありません。神を崇める心の高まりが祈りには大切なのです。」信仰に満足するだけでは神への深い信仰とはいえない。神が使わされたキリストと一体化した生活を送ることが信仰の目的である。「主なるあなたを愛せよ。」「自分を愛するようになあなたの隣り人を愛せよ。」これがキリストの最も大事ないましめである。だが、自らの信仰にのみ満足してしまふことがなんと多いことか。善きおこないも、しばしば神のため、ひいては隣人のためでなく、自らの満足のためになされていまいだらうか。マザー・テレサにみられるのは、我われが陥り

がちな独善的信仰とは明らかに異なっている。彼女の献身と我われの利己的態度を見比べて学ばなければならぬ。忙しいと不平を言う前に、過酷な日常の中で彼女がみせる心の安らかさに注目しなければならぬ。

疎外感と博愛の欠如、これが現代の最大の病であり、悪です。

「今の活動が将来に引継がれていくでしょうか。」とマザー・テレサの意見をきいたとき、彼女はこう答えた。「もちろんです。神は、きっとまた私の様に無力な者を力づけ、この仕事のためにお使いになるでしょう。神のお力添えがある限り、この運動は引継がれていきます。」

ボンベイ「ピンマット誌」より転載

#### 新会員ご紹介についてのご案内

皆様のご友人・ご親戚の方などから新会員をご紹介いただけますので、ご住所とお名前をお知らせ下されば事務局直接お願い申し上げます。

国際MRA日本協会・事務局



左から山根夫人、一人おいて修作さん、柳沢夫妻

## 「一粒の麦」の仲間たちの集い

一月二十六日、憲政記念館の第一会議室で「一粒の麦・山根君を偲ぶ」という会が開かれた。会場の正面席には山根夫人と、父親の顔写真を抱いた長男の修作氏が並んで座った。

集まった人びと三十七名のほとんどはかつて石川島播磨重工で働いていた人、また現在働いている人びとが多かった。

挨拶にたったのは元石川島播磨重工労働組合委員長の柳澤鎌造氏（現参議院議員）だった。

「私たちの親しい仲間だった山根松男さんは昨年十一月十二日に永眠されました。人間が変わるといふことを実際に教えてくれた山根さん、そして人間が変わるとき、大きな仕事をなすということを教えてくれた山根さんを偲んで、当時を語り合いつつ山根さんの冥福を祈りたいと思います。

私と山根さんの出会いは、山根さんが競輪で借金を作ってしまった、労働金庫に借金を申し込んできたときから始まった。当時、私は組合の委員長であり、山根さんが既に三回に渡って借入れをしており、規定では三回以上の借入れは駄目になっていたときだった。

私は彼にこういいました「家に帰ってもう一度、奥さんに相談しなさいよ」すると彼は五、六歩飛退いてこうさげびました。「女房に話すくらいなら死んだ方がましだ」と。

私は「そう、死ぬのならとめませんよ。」

彼は長いあいだ考えていたが、やがて「委員長が家にきてくれるなら話します。」

私は住居の地図をかいでもらい、その夜、ここにおられる奥さんと修作君に会った。

「再び競輪はしない」「ぜひたち直りたい」という決意を奥さんと私にした山根さんの顔はしんけんだった。「ほんとうに競輪をやめる」「給料はかならず封のまま奥さんに渡す」ということの確認をしたので私は彼の借金先をきいて始末することにした。聞いているうちに驚いた。その数の多いこと。

このあと私は利子をとつていた者には半分で利子をとつていない者は全額返済として、労金より借入れ始末をつけることにした。

競輪通いはピタリととまって見違えるような山根さんの生活が始まった。

その後、最初の昇給のとき、いつもは職場で最低だった山根さんが最高になった。山根さんは昇給辞令をもち帰って神だにまつたたと話してくれた。

また山根さんは自分のお兄さんを長いあいだ恨んでいた。自分に金を貸してくれないというのがその理由だった。山根さんはその自分の誤まりを認め、そのことを謝罪するためにお兄さんの家をたずねた。

出迎えたお兄さんは、山根さんの姿をみるなり「松男、随分変わったなあ。さああがれ、あがれ」「兄さん今まで恨みをもっていて申訳なかった」と謝まる山根さんにお兄さんは「おれは今まで何もしてやれなくて申訳なく思ってたんだ。許してくれ」と言つて、新調したばかりの三つ揃いの背広とオーバーをいままでの償いとしてそのときいただいたのだと話してくれました。

そのうちに「一粒の麦」ができるようになった。この劇は山根さんを初め他の仲間たちの新しい決心と体験をそのままもち寄つたものであった。

「劇「一粒の麦」は小田原のアジアセンター設立の際の公演を機に小田原市民会館、大阪、神戸、東京、川崎と各地からの要望に応じて上演された。十七年前・昭和三十七年十月のことであつた。

劇は誰がかいたものでもなかつた。みんな体験をもっているのだから、それをもちよればよい、自分のことを自分でやればよいと。そしてこの劇の練習と公演を通じて私たちは変わつていった。

初めは豊洲の体育館だつた。みんな生れて初めての経験だつた。私たちはこういう歌を作つ



劇の中の山根さん

て唄つた。

正直、純潔、無私、愛  
心の扉を開こう

明るい世界を作るために  
山根さんは劇のあとで、よく競輪好きの人たちをつかまえて自分の経験を話していた。

私自身、もう一度十八年前の自分に戻りたいと思う。」

出席した一人ひとりが山根さんについて、劇での思い出について、語つたが劇の中で社長秘書の役をした渡辺さん（このことが契機で後にほんとの秘書となり、現在は二人のお子さんのお母さん）はこう話していた。「私の強く残る印象は、舞台の上で委員長が一生懸命に話しているとき、山根さんがわざと横を向いて座っている姿です。委員長の話が気になるといつたその姿が印象的でした、そしてその舞台の山根さんと同じように人間でそんなに急にかわれるものかしらという気持ちは、私も初めて台本をよんだときからありました。しかし、劇を通じ、ミーティングをし、静かな時間をもっているうちに意外に簡単

に変われるものだと判りました。今日もまた新鮮な気持ちでいます。」



劇の一場面



劇のあとで舞台にたった土光会長

## 九州MRA協会便り

九州MRA協力会では、例年二回でいどの講演会を実施することが恒例化しているが、ことは、二月二十一日福岡市中央区のはかた会館で会員会社の人事、労務、教育担当者ら約三十名がつどつて本年二回目の講演会をもつた。

まず、これも当協会の年中行事として定着してきた訪韓視察の研修結果報告を、昨秋十月、第十回目の団長として無事任を果たした西部ガスの因信吾総務部長から約一時間にわたつて聞いた。

一行が帰国の日に、釜山の学生デモが起つたという、きわどいタイミングだつただけに、朴体制崩壊直前の生々しい現地報告は、例年の視察をこえるものがあり、参加者の関心をそそいでいた。

つづいて、九州大学心理学教室の安藤延男教授による「人生危機とその援助」と題する講演に移つた。これは、家庭で、職場で、世代で、また大きくは国家や民族のあいだでできしんでい

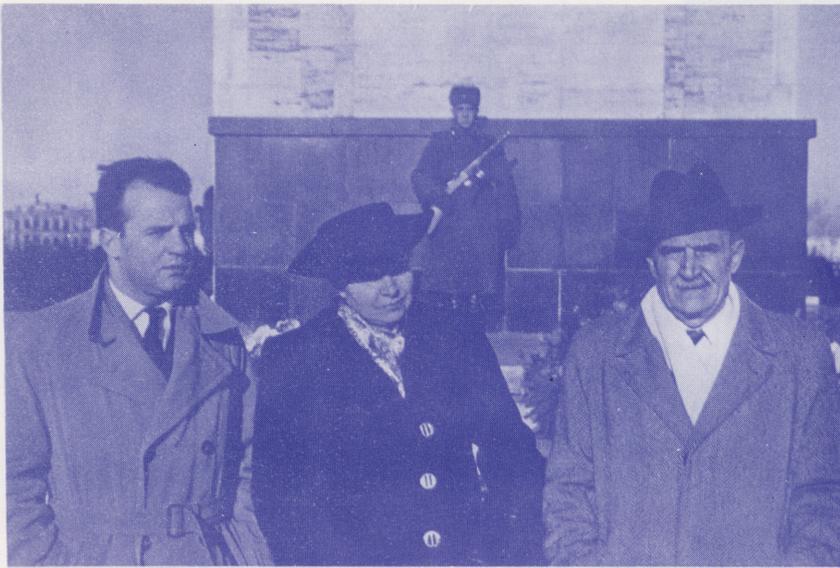
る現代のギャップの本質と実態に、少しでも迫つてみようとの、当協力会事務局長である西部ガス亀津正武人事部長の意図から出た企画であつた。国際MRAの本年度のスローガンである「ギャップを埋めよう」というキャンペーンの一翼を担うというねらいもあつた。

安藤教授は、最近の世相に現われた精神の荒廃や危機の実例を引きながら、北九州市の有志でつづけられている「いのちの電話」などの援助活動も紹介、みるみる失われつつある地域社会連帯の現状を指摘して、コミユニティ再生の道を説き、聴衆に深い感動を与えていた。MRAの網の自が至るところで息づいている一面を想わせた一日であつた。

(大津 博)

EC（欧州共同体）の基礎となった戦後のドイツとフランスの融和のため、その後で偉大な役割を果たしたイレエヌ・ロー夫人が、このたびアメリカに向う途次三月八日から二週間にわたって、わが国を訪問するというしらせが届いた。各方面で歓迎の動きが始まっているが、彼女の横顔について船本三恵子さんに語ってもらった。

〔写真〕 ベルリン・ソビエト戦争記念碑の前のイレエヌ・ロー夫人（中央）その右、夫君のビクトール氏、左は令息ルイ氏。



Victor and Irène Laure with their son, Louis, in front of the Russian War Memorial in Berlin

## 憎しみのない世界をつくる

マダム・ローにはじめておめにかかったのは二年前の夏、スイスのコーの世界大会での一日だった。第二次大戦後のドイツとフランスを融合させるかけ橋の役割を果たした彼女は、その日、私たちを前にして、かつて日本を訪問したときの想い出を、さながら孫たちに話しかけるように暖かいまなざしで語り始めた。そこには過去の長いつらい闘いを全く感じさせないものがあった。視野の広さ、誰をも愛する暖かさに溢れていた。

さて彼女について知っている事を語ってみたい。一八九八年、彼女は建築業者の娘として生まれ、長じて看護婦となり、筋金入りのマルキストであった船員のビクトールと結婚した。五人の子供の母親として、十数時間にわたる看護婦としての勤務と、子供の世話で十分な睡眠時間もとれなかった。しかし他人の不幸を見過ごす事のできない夫妻は、さらに貧しい中にも九人の子供をひきとった。第二次大戦後、彼女はマルセーユ選出の国会議員、社会党中央執行委員をつとめている。しかし夫人の偉大さを語るのには次のエピソード

である。戦争当時、彼女は反ナチ抵抗運動の中心人物の一人として活躍していた。ドイツのゲシュタポ（秘密警察）は、彼女の息子をとなえ、拷問にかけた。人間にとって一番つらく悲しい事は自分が傷つけられるよりは愛する者が傷つけられている事、そしてその事に対して自分が無力であるという事ではないだろうか。その意味で、ゲシュタポの行為は、母親としての彼女にとつては、何よりも効果的な拷問だったといえる。戦争が終った時、彼女の心は、ドイツに対する憎しみでいっぱいだった。彼女はあらゆるドイツ人が死に絶え、ヨーロッパの地図からドイツが抹消される事を願った。一九四七年に彼女はヨーロッパ統一を回復するためのMRA、スイスのコー会議に参加した。その時、会議にドイツ人も参加しているのを見て、彼女はすぐに帰り支度をはじめた。とうていドイツ人と同じ屋根の下にいる事はできないと思ったからだ。MRAの創始者フランク・ブックマン博士は彼女に次のように問いかけた。

「あなたは、ヨーロッパ融合のために戦っている。そんなにドイツ人を憎んでいて、どうしてヨーロッパの融合ができるのだろうか。」夫人は悩み、考え続けた。しかし憎しみをいだいた人間は、真の融合をつくる事はできないという事、階級闘争と人類愛は本来矛盾している事に直面しなければならなかった。彼女は、ドイツ人を抹殺したいと願った事をドイツ人に心から謝罪した。夫妻と子息はドイツに渡った。州議会でも、ラジオでも、自分で、自分達を盲にしていた憎しみについて謝罪した。そして人間のチェンジをどうして憎しみのない世界を作る事ができると話した。この彼女の謝罪は戦後のヨーロッパに統一の芽をふかせる肥沃な土壌となったのである。心に焼きついた憎しみを取る事はむずかしい。天はすべての人に、「憎しみ」を試練として与えるのではないだろうか。「憎しみ」を乗り越え和解をし、融合を遂げた偉大な先達に、この度、日本で再びお目にかかれる事は、大きな喜びである。（船本三恵子）

# 八〇年代へのかけ橋

長野 清志



「不幸な難民をもっと受け入れよう」と要請したマーガレット・タッカー女史。うしろはオーストラリア各地より参集したアボリジニ(原住民)のリーダー達

イラン、そしてアフガニスタン紛争、難民問題、資源・エネルギー問題等、八〇年代の幕開けは決して希望に満ちたものとは言えなかった。増々広がりつつある南北間のギャップ、ある国々では栄養のとりすぎからの発病が社会問題となり、一方、飢餓にあえぐ沢山の人々を抱える国々がある。一体どうすれば豊かな国々と貧しい国々のギャップが埋められるのだろうか。

また異なる文化間そして人種間のギャップは、いろいろ異なったアプローチが必要とされるだろうが、最も重要なことのひとつはそれらを代表する人びと全てが席を同じくし正直に話し合うことである。環太平洋構想を携えて大平首相の訪れた国、大きな資源と可能性を秘めた国、ここオーストラリアのシドニーで去る一月十八日より二十七日にかけて開かれたMRA国際会議ではまさにそれが具現化された。

自由・労働、両党よりの政治家、原住民アボリジニのリーダー達、そしてアジア・太平洋地域、アメリカ、ヨーロッパそしてアフリカ諸地域の二十一ヶ国の代表をも含めて三百人余りの参加者を得、会議では八〇年代に

おいて世界の当面している様々な問題について真剣にかつ心を開いた話し合いがなされた。開会式の議長を務めたアラン・グリフィス氏(政府外交問題特別アドバイザー)はこの会議の目的は社会を変える原動力となる人を変えることにあると述べた。また、『健康と心の健全さ』という題で講演したマツケラー厚生大臣は翌週にはフレージャー首相と共にアフガニスタン問題検討のため旅立った。

また、『健康と心の健全さ』という題で講演したマツケラー厚生大臣は翌週にはフレージャー首相と共にアフガニスタン問題検討のため米・欧へと向かった。また野党・労働党の鉱物・エネルギー担当スボークスマンのポール・キートン議員は、オーストラリアはその与えられた自然の富をアジアに分け与えるべきだと会議の中で述べた。

## ギャップを埋める実践としてのアボリジニの人々の協力

アボリジニとはオーストラリアの先住民族であり、その歴史は四万年をこえるといわれている。現在の人口はオーストラリア全人口、一千四百万に対し約十六万、そのたどった過程はアメリカ

カ・インディアンのと似ている。まだまだ一般のオーストラリアの人々の彼等に対する理解のギャップには大きいものがあるが、ここでも彼等との間に信頼の橋をかけ共に新しい国造りを目指そうとするオーストラリアのMRAチームの姿があった。この会議にも参加されていた元教育大臣のキム・ビーズリー氏の在任中に行った彼等への教育機会均等などの政策も勿論その大きなものであるが、オーストラリア各地より駆けつけたアボリジニの指導者達そして若きリーダー達も共に会議の運営に参画し、責任を分かち合うことでそれに応えていた。『もし誰もが心を使えば』という本の著者でアボリジニの人々の生活上のため活躍しているマーガレット・タッカー女史は語った。『MRAはお金で買えぬ教育を与えてくれました。私達の文化を白人に与え、彼等の文化を学ぶということはよいことだと知りました。』『神は世界の利益になるためにこの偉大な国を私達に与えて下さいました。私達は黒人・白人が共に同等のオーストラリア人として世界に与えなければなりません。オースト



①



②



③



④

- ① ダイナミックなニュージーランドラリオ・マリオ族の歌とダンス
- ② 繊細で優雅な動きをもつラオス舞踊
- ③ 世代から世代へと伝えられたアボリジニの伝統と文化
- ④ 会議を更に盛り立てたパシフィック・コーラス——日本の青年達も一翼を担う

ラリアの人々は世界の不幸な人々のために新しい故国を提供するだけの大きさがあるでしょうか?』と、オーストラリアがもっと難民を受け入れるよう要請した。

—文化の夕べにみたパシフィック文化の多様性と豊かさ—

会議期間中の一夕、太平洋に面する国々の代表による『文化の夕べ』が催されたが、それはまさに世界のあるべき姿を示した観があった。ニュージーランドのマオリ族によるダイナミックな歌と踊り、トンガの人々の底抜けに明るい歌と踊り、ラオスの人々の優雅な身のこなしをもったダンス、オーストラリア、ア

ボリジニの人々の受け継がれた伝統的ダンス等など、それぞれ独自の文化を示し、今更乍らこの地域の文化の多様性と豊かさを如実に示してくれたと同時に、このように世界が互いの文化を尊重し合い融合し合うことが出来ればと感じた人は多かつたはずである。シドニーだけでも七〇カ国以上からの移民が住み、白豪主義といわれた頃とは隔世の感がある。その意味においてもオーストラリアは異なる人種・文化を融合し平和裡に生きるというデモンストレーションを世界に示すことが出来るのではないだろうか。

—一人ひとりがかけ橋に—

会議を通じて多くの卒直な意見や体験の交換がなされたが、それは参加者一人ひとりがかけ橋になろうという意識に裏打ちされていた。パプアニューギニアの女性は白人により持ち込まれた飲酒の習慣が自分の民族と文化を著しくそこねたと恨んでいたが、それは間違っていたと述べ、より良い友好関係を築くため共に働きたいと語った。一つ屋根のもと、色々な人種、立場の人が寝食を共にし謙虚に正直に語り合うことにより、それぞれの深い心情が吐露され、これが人々の心をいやすのである。最近アジア六ヶ国を訪問しその極貧の人々に接してきたキャン

ベラ・タイムスの副編集長、ジョン・ファーカーソン氏は彼の話をこう結んだ。「この旅はフランク・ブクマンの言った『世界には全ての人の必要を満たすだけのものは十分あるが、どんな欲を満たすには十分でない』という言葉に新しい意味を与えてくれた。もし先進国における個人的及び国家的などん欲に答えられない限り、飢える人の必要にこたえることは不可能だろう。そこに私達一人ひとりが自分から始められる点があるのではないか。」

この会議に日本の代表として参加された埼玉県議会議員の榊たか子さんは、フランク・ブク

マン博士の日本に対してもたれた「日本はアジアの灯台に」というビジョンを実現させるべく道義の回復に努力したいと決意を述べられた。また、かねてオーストラリアでMRAのトレーニングを受けていた日本の若い青年男女、寒河江、山浦、星、真鍋そして柴田さん達もそれぞれ会議で責任を立派に果たし、日本のかけ橋となってくれている姿に大変意を強くさせられた。八〇年代に向け日本の果たすべき役割は増す大きくなるはずである。世界に貢献出来る日本となるためには、私達一人ひとりにかけ橋になる決意が必要なのではないだろうか。